

内戦と相互不信のなかで

ルワンダ・ブルンジの危うい平和

村田 信一

内戦下ルワンダへ

1994年6月下旬、私は内戦下のルワンダに向かった。反政府ゲリラであるRPF(ルワンダ愛国戦線)と、ルワンダ政府軍との戦闘が激化していた当時、首都キガリの空港は閉鎖されており、国連やNGOでさえも陸路だけが入国の唯一の手段であった。ケニアから隣国のウガンダに入り、そこで車を手配してルワンダへ入った。

「ルワンダへようこそ」という看板の立っているところに、RPFの検問があった。そこには他にもフランスやイタリアのジャーナリストたちが待っていて、なかには5日も足止めを食っているという者もいて、ほんとうに入国できるのか不安になった。RPFの兵士は言った。「ベルギーのわれわれの本部に許可をもらわなければならない」。ここで追い返されてはたまらない。祈るような気持ちで待つこと2時間余り。ジャーナリスト全員に許可が出て、RPFの護衛を受けながら、首都キガリに向かった。キガリまでは距離にして約80キロ、2時間ほどの道のりである。ルワンダに入って驚いたのは、幹線道路がしっかり整備されているということである。舗装状態も悪くない。しかも一面に緑と山が広がる光景は、自分がアフリカに来ていることを忘れさせかねないものであった。

もう一つこの国に入ってすぐに気がついたこと

がある。それは、人間の姿が見えないということだ。ウガンダでは、国境近くでもたくさんの人がいたのに、ルワンダに入ると不気味なほどの静けさが広がっている。途中、2、3カ所の食料配給センターに集まっている人々をのぞいては、ほとんど人影を見ることはなかった。道の両側や山肌には畑が広がっているし、土作りの家もある。家の前には、乗用車が止まっていたりするが、全てが打ち捨てられているのだろうか。4月に大統領が暗殺されて以来の大虐殺は聞いていたが、走る車から見ているかぎり、虐殺や破壊の痕跡はほとんど見つけることが出来なかった。

キガリ郊外に差しかかると家並みも増えてきたが、やはり人の姿はない。ただここでは、破壊や略奪のあとが明らかであった。どの家もドアは開け放たれ、家財道具や本や衣類が家の前にまで散乱していた。車のエンジンを止めると、聞こえるのは鳥のさえずりと時々響く銃声や砲声だけである。この辺りに住んでいた人たちはどうなったのであろうか。殺されたか、逃げたとしてもほとんど何も持たずにあわてて逃げたのだろうか。

われわれはそのままキガリ郊外まで行った。1993年から派遣されている国連ルワンダ支援団(UNAMIR)の本拠地となっているホテルがあり、その近くには近代的な陸上競技場があった。

われわれが着いたところはそれらのすぐ近くである。教会かその関係の施設であったところであろうか、案内された部屋の中には十字架や聖書があり、壁にはイエスキリストの絵が架かっていた。この絵はイエスを含め全員が黒人として描かれており、大変興味深かった。

夜になると、完全な暗闇の中で生活しなければならなかった。フランスのテレビ班などはジェネレーターを持ち込んでいたが、われわれはろうそくを何本も立ててしのいだ。さらに厳しかったのが寒さである。標高1500メートルほどの高地にあるせいか、非常に寒いのだ。私はあるものすべてを身につけ寝袋に入り、さらに薄手の毛布をかぶって寝たが全然寝つけなかった。これほどの前線近くにいながら、われわれには状況があまりつかめていなかった。銃声や砲声がすぐ近くで聞こえているから戦闘が続いているのは判ったが、RPFと政府軍のどちらが有利に戦っているのかもわからないのだ。夜は横になりながら、BBCのニュースを聞いていた。

虐殺現場を訪ねる

7月1日の朝、われわれジャーナリストはUNAMIRの本部に情報を聞きにいった。もっとも、この国連PKOが実際何をやっているのかは、よく判らなかった。ただRPFが攻勢をかけていて、キガリを二分して戦闘が続いているということが判っただけである。私の来る前から現地で取材しているジャーナリストに聞いたのだが、どんな取材もRPFの許可とエスコートなしにはできないらしい。

私はまず虐殺の現場を見たかった。このことをRPFの広報担当将校のトニーに言うと、護衛の兵士を付けてくれた。現場は、キガリから南に約40キロ行ったニヤマタというところにあるヌタラマ教会だという。昨日来るときに通った幹線道路で

はなく、未舗装の道を通った。赤土でぬかるんでいたの、何度も車を降りて押さなければならなかった。結局、教会に着くまでに4時間くらいかかってしまった。裏道を通った上に、RPFの兵士もあまり道を知らなかったようだ。

教会は緑に覆われた林の中にあった。兵士は、「あれが虐殺の現場だ」と指さしたきり、自分では近づこうとしなかった。教会から20~30メートル離れていたが何か異様な臭いが漂ってきていた。恐る恐る近づいてみると、そこにあったのはまさに地獄絵図であった。それほど大きな教会ではないが、外に数十体と中には数えきれない死体が転がっていた。虐殺のあったのは4月らしいが、ほとんどの死体はミイラ化していた。教会のなかは例えようもない腐臭が充満していて耐えがたいものであった。

「彼らは近くの村から避難していた人々です。教会にいれば助かると考えたのですが、みんな殺されてしまいました。」

RPFの兵士は静かにそう語った。

この辺り一帯では、かなり大規模な虐殺があったようである。すぐ近くにも沢山の人が埋められている広場があった。住民たちの話によると、5000人くらいが殺されて埋められているという。ルワンダ全土では、50万~100万人が犠牲になったと言われているから、国中のいたるところがこのような状態なのであろう。こんなことが起きたあとでは、誰もが悲しみにくれて失意のどん底にあるのかと思いきや、避難先から戻ってきていた一部の人々の表情は明るかった。これもアフリカの人たちの特性なのであろうか、悲しみをすぐに忘れ去る、あるいはそれを表情に出さないのか、どちらにしても私は奇異な印象を受けた。

キガリ，難民，戦闘

翌日，宿舎の近くにある陸上競技場に行った。ここは内戦が始まって以来難民キャンプになっていて，UNAMIRによると約1万人の人々が避難しているという。

当初はこの内戦を単純にフツ対ツチの民族紛争と捉える見方が支配的だったが，現地で私が見たかぎりではそう簡単に割り切れるものではないという気がした。フツは背が低くて小太りで，ツチは背が高く痩せているとはよく言われたことではあるが，そういう判別の仕方では判断できないことが非常に多かったからである。両民族間の結婚も，かなり進んでいたという。また，フツの政府に反抗しているといわれたRPFも，その兵士の半数近くはフツだという。しかし，暗殺されたハビヤリマナ大統領が民族対立を煽っていたことは事実である。彼はルワンダ北部のギセニの出身であるが，いわば一族による独裁政治を行っていた。それに対する反発や破壊活動もあったが，それらを全てツチの仕業として押さえ込もうとしていたのだ。RPFにフツの反ハビヤリマナ派がかなりいたのは当然といえば当然なことであろう。

陸上競技場での難民の生活は，ザイルやタンザニアに逃れた人々に比べれば格段に良かったと思う。食料も水も十分ではないが常に手に入ったし，RPFと国連の保護下で安全でもあった。競技場の中には，煙草やジュース，ビスケットなどを売る露店や床屋，裁縫店などが開かれていて，観客席の片隅ではUNAMIRの兵士が神父となり，賛美歌の斉唱も行なわれていた。さながら小さな町のようなであった。

7月3日は1日中戦闘が激しく，夜になっても近くで砲声が聞こえていた。翌朝，トニーがわれわれを市内の教会に連れていくと言い，他の報道陣と共に市内へ行くとすでにRPFが制圧した後

であった。夜のうちに攻勢をかけたようだ。道端にはまだ点々と死体が転がっていた。沢山の市民が教会などに避難していたらしく，RPFの兵士はどこに行っても歓喜と共に迎えられていた。RPFは同じ日に南部の都市ブタレも制圧した。翌日記者会見の席に姿を現したRPFの司令官ポール・カガメは，「数日中に組閣を終えて，新政府を樹立する」と語り，事実上の勝利宣言を行なった。7月中旬までにRPFはルワンダ全土をほぼ掌握し，4月以来の血みどろの内戦は一応収束した。

ブルンジの緊張

9月下旬から私は再びこの地域を訪れ，ブルンジからルワンダ，ザイルのゴマと陸路で移動した。ブルンジはルワンダとほぼ同じ人口構成であるが，少数派のツチが軍部を抑えている。このことが多くのフツの人々には不満であるようだ。首都のブジュンブラには，ツチとフツの人々が別れて暮らす地域がいくつかある。その中でも一番緊張していると言われていたカメンゲ（フツ居住地区）に行ってみた。ブジュンブラの町は見たところ非常に平穏で，ルワンダ以上の内戦になるかもしれないと聞いていた私は少し拍子抜けしたのは事実である。しかし，市内の要所には迷彩服に身を包んだ兵士が検問を設けており，何か目には見えない緊張感が感じられた。

人々に話しかけると，彼らは別に臆することなく話してくれたが，写真撮影は拒否された。1時間以上探して，やっと一人の若者がインタビューと撮影に応じてくれた。表通りから裏に入ったところで話を聞いたが，その辺りの建物の壁は銃撃されたようなあとがたくさん残っていた。「われわれはフツだというだけで弾圧されているんだ。軍は毎晩パトロールして，好きなようにわれわれを逮捕したり射殺している」。彼の周りに近所の住人

たちが集まってきたが、みんな彼の発言を聞いて頷いていた。

殺された人たちの墓に案内してくれと言うと、何か所かの墓地らしき場所に連れていかれた。それらは庭の端だったりゴミ捨て場の中だったり、一つとしてまともな墓はなかった。「墓まで運んでいく時間がないんだ。殺されてからすぐに埋めてしまうのさ」。案内してくれたフツの若者はそう言って肩をすくめた。

ブルンジで私を案内してくれたトーマスは、ウガンダ出身のフツである。彼に聞くと、「フツとかツチとかは、ほんとうは関係ないんだよ。みんな普通につき合っているしね。これは政治的な問題だと思う。ルワンダのこともあるし、みんな疑心暗鬼になっているんだ」。

私の宿泊したホテルはフランス人が経営しているホテルで従業員にはフツもツチもいた。フロント係の女性は3人いたが、全員がツチでみんな身長が180センチ近くある典型的なツチの女性たちであった。「フツは信用できないわ。彼らのほうが人数が多いから、皆殺しにされるのではないかという不安は常にあるの」。彼女たちはそう言いながらも、フツのウェイターが近くを通ったときには素早く話題をそらしていた。表面的には共存しているように見えるが、深層心理には互いに不信感が根づいているのだろう。

私がブルンジに滞在しているあいだ、直接に暴力沙汰を見ることはなかったが、夜のニュースでは毎日テロリストによる銃撃や爆弾事件があったと報じられていた。同国には、アフリカ諸国からなる軍事監視団が展開している。彼らも紛争の発生を極度に恐れていた。「いつルワンダのようになってもおかしくないでしょう。それを未然に防ぐのがわれわれの任務ですが、状況は厳しい」。セネガル軍の将校は、彼らの胸のうちをそう語ってく

れた。ブルンジでは現在までのところ大規模な紛争は起きていないが、軍とフツ過激派の衝突などは頻繁に起こっているようだ。ルワンダのようになってから国際社会が目を向けても遅いのである。

ルワンダ再訪

ブジュンブラから北上してルワンダに入った。内戦が終わって3カ月。避難していた人々が戻り始めていると聞いていたが、ブタレの町に入るまでほんの数人しか人に会わなかった。キガリまでの間は予想以上に人が戻ってはいたが、破壊された建物などは手つかずのまま残っていたし、畑もそのまま放置されているものがほとんどであった。

キガリは予想以上に活気があった。多くの市民が殺され、あるいは隣国のザイールやタンザニアに逃げてしまったが、ウガンダやブルンジから30年来のツチの難民たちが帰ってきているのだ。人々と話しても、内戦など遠い昔の出来事だったような口ぶりであった。世界中から、数百のNGOが入ってきているらしいが、確かに白人の乗った新車の4WDを多く見かけた。農業を中心に復興に尽力しているということだが、キガリで見るとかぎりでは彼らのいるせいでホテルやレストランの値段が上がり上がっていると感じた。

直後に訪れたゴマでは、主にフツの難民たちが過酷な状況に暮らしているが、彼らの多くは旧政府軍に管理されており帰還をためらっている。ブルンジでもそうだったが、根本的に互いの不信感を取り除くことが肝心である。そうしなければどんな援助もすべて無意味に終わるだろう。紛争の先送りにしかならない表面的な支援ではない、彼らが心から信頼しあえる社会を作り出すにはどうしたらいいのか。私には答えは見いだせなかった。

(むらた・しんいち/フォト・ジャーナリスト)